

「我とそれ・我と汝5」

～走光性～

ヨハネ1：1～12

だまし絵を見たとき、2つの物が本当は同じ色であるのに違う色であると錯覚してしまいます。また、色というのは7色の可視光線を目が認識している状態であり、本当は色というものではなく光なのです。このことから、わたしたちは目で見ている物事をどれほど錯覚し間違えて認識しているかが分かります。神は光としてこの地に來た、と聖書に書いてあります。神様が例えを示されたときは、その性質から学ばなければいけません。万物について光・色を通して、神様はわたしたちにどんなメッセージをしているのでしょうか。空は光の波長の長さで青色や赤色に見えます。青い空は澄んだ心をイメージさせます。夕方を経て暗闇になっていくと、心の中の寂しさや孤独を見出させます。しかし、その中で夕日の赤い光は、ずっと変わらないイエス様の十字架の愛の姿を表しているように思えます。神様は天と地を創造したとき「光があれば」と光と闇を区別されされました。一時の絶望の暗闇の後に、朝の真っ青な光を用意してくださいました。わたしたちは物事を決めつけて見るようになりました。その内側の本性を見出そうとするのではなく、外側を見て判断するようになりまし。原因は、アダムとイブの原罪から、人は裏切る存在だと知ったからなのです。アダムとイブは、神様に「我々に似るように」と内側を造られました。心が失われ責任転嫁の罪を犯したときから、人は人を裏切るものだと見るようになってしまいました。自分が裏切られてしまったように、裏切る準備をするような人間関係になってしまったのです。物事を瞬時に判断するには、脳の動きは遅いので過去の記憶をたどり固定概念に頼るようになっていきます。だまし絵を見るときもそうです。しかし見方が変わると本当の色が見えてくるように、固定概念は変えられることができます。神様は、固定概念に囚われているわたしたちを変えようとしておられます。見えすぎると考えなくなるのもよいことまで考え過ぎてしまうので、神様は見えなくなる夜を造り、「目をつむって私のことを思いなさい」という時間をつくりました。

■ 走光性

走光性とは生き物が光の方を向いて移動する性質です。ひまわりが太陽の方を向いたり、虫が光に集まったりするように多くの生き物が正の走光性をもって生きています。ミミズやモグラは光から離れた負の走光性をもって生きていますが、地に落ちた物体を細かく処理し土壌を耕す大切な役割があり、土壌が安定するという完璧な環境が造られています。このように神様は天地を創造したとき、光も闇も完璧に造られたことが分かります。しかし、悪しき者は、その闇を悪に変えました。悪しき者は、人が見えないの見えるようにしたので、人は見えないことに恐れが生じるようになりました。わたしたちは神様を見るときに、なぜ「我と汝」から「我とそれ」の関係で見てしまうようになったのでしょうか。隣人と接するとき、その人の存在を愛そうとするのでしょうか、それとも有益か有害かという利益の観点から見るのでしょうか。人は本来、利益の観点から人を見るような闇の性質には造られていませんでした。自分より豊かな人を見ると比較が生じ、「我とそれ」の関係になります。人は父という存在からさまざまな価値観をもたられさせられます。わたしたちが父につまずき間違った価値観をもったときに、神様はイエスキリストを通して本来の父の価値観をもたせようとしてくれました。父の姿とは、すべての人の底辺に生まれすべての人の痛みを理解しようと自らが背負って生き、痛んでいる人を助け苦しんでいる人の元に行き、悪に立ち向かう姿、悪の剣に対してではなく、その人の罪の根源に向き合おうとする姿です。イエスキリストはわたしたちに罪を示された後に、わたしたちの罪を十字架に背負われました。父なる神は、父が造った人間が間違った罪を犯したなら、父自らがその罪を背負うという姿を示されました。

■ 光

光に対して物理的な要素を見出したなら安心、物理的な要素を伴わなくても本質を見出そうとすると平安です。子どもは離れている親を探して見つけると安心します。物理的に見えないと不安なのです。いつか何かを失うのではないかとこの恐れがあり、その恐れは罪を生じさせます。不安なのは、生まれたときから心に闇があるからです。その心の闇にイエスキリストは光をもたらし、光の本質を伝えようとしてくれました。光は決して失われることはありません。闇は光に打ち勝つことはできません。どんな闇でも光が照ると明るくなります。隠すためには物を用いて光を遮ればよいので、悪しき者はわたしたちの心の中に物を作ろうとします。罪、過去の記憶や経験を用いて、本来の光を屈折させ届かなくさせようとしています。だからイエスキリストは、1年で最も深い暗闇の時期のクリスマスに、汚い家畜小屋に光として生まれてくる必要がありました。イエス

キリストは光を通して、わたしたちの心にある害を取ろうとしたのです。心理学のロバの話で、ロバはおいしい草を求めて、左の草が大きいのか右の草が大きいのか悩んで行ったり来たりし、結局どちらにも行けずに死んでしまった話があります。人はそんな簡単な決断のときに正しい決断ができずに餓死を選ぶ、という心理を表した話です。神様はそんなわたしたちの暗闇に光を灯したかったのです。神様は、夜に月星を用意し太陽が照らしていることを伝えていますが、アダムとイブの原罪のときから、闇夜は先を明日を見せせない不安な恐れのある存在になりました。闇にいる人が光を受け入れるには、どうしたらいいのでしょうか。大量虐殺をしたヒトラーの闇とわたしたちの闇は何ら変わりありません。クリスチャンは心の中に闇があることを分かっています。自分が汚いことを知って初めて光を受け入れることができます。

■ ①闇を知る 認める

わたしは悪くないと思うことはないのでしょうか。人を赦せない、人にへつらう、繕う、自分が生き残るために人のせいにする、裁き合うなどの闇があることを理解しましょう。わたしたちが闇を知り認めて初めて、光はそこに来ることができま。ひとりのみどりごが、わたしたちのその罪のために生まれました。それは誰一人として滅びることなく永遠のいのちをもつためです。罪を犯した人が赦されるためです。赦されるためには、人のせいにする罪を認めなければなりません。人のせいにするのは、失敗したとき、責められ指摘され怒られバカにされる現実があるからです。しかし目に見えている現実、側面を見誤ってだまし絵のように偽りなのです。現実という目におびやかされないように、夜があるのです。目をつむって神様を思うとき、月星を眺め闇の中で光を見るとき、わたしたちは神様に向くのです。アブラハムは息子イサクを捧げなさいと言われるような苦しい現実で襲われたとき、夜中神様と向き合い、月を見て神様との約束を思い出し、朝になって光の中を歩み、神様との祝福の約束が守られました。モーセは山で神様と出会い、まぶしいほど光輝きました。わたしたちは光輝く存在として神様に造られました。しかし、わたしたちの闇を悪しき者に占領されていると、光を失っていきます。世の中と調子を合わせ、人の作ったネオン照明に心を奪われると、神様の真っ直ぐな光を失わせます。誘惑の光、墮落の光、道を踏み外させる光です。神様の光は真っ直ぐなもので、ロバの話のように迷わせることはありません。ロバのようにならないためには、罪を認めることに悩まないことです。わたしは悪くないのではないかと悩まない、つぶやかないことです。分かっているのに認めたくない、罪は認めるものです。認めたらいいのです。十字架の赦しがあるのです。イエスキリストが来てくれたクリスマスを祝う恵みが与えられています。イエス様を迎えるには、罪を認めることです。「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ1：4～5) 罪を認めることがいのちであると言っています。その人の闇の中に光が輝くことができるからです。

■ ②光を闇へ

自分が汚いことを知って初めて光を受け入れることができます。闇は光に打ち勝つことはできません。闇を認めるだけならただの後悔です。しかし悔いて改める道は聖書の祝福です。光を入れると、闇だった傷は慰められ喜びに変わります。神様は、懲らしめを与えた後には慰め愛を伝え回復させ、わたしたちは悔いて改めることができ神様に立たせてもらいます。「夕があり、朝があった」神様は必ず朝を用意してくださっています。夕を知らなければ朝を知ることができません。闇は恐れではなく、本来は神を見る祝福です。苦しい現実のときこそ神様を見るチャンスです。神とともに歩むと朝が来ます。

■ ③光の証者

イエスキリストを信じていた多くの人を迫害し殺し憎んでいたパウロは、イエスキリストに出会い、目が覆われた闇のあと、ほんとうに見えることがどういふことなのか分り、本当の光の証者へと変えられました。わたしたちも誤って見ていないのでしょうか。パウロと同じように、相手や自分を傷つけていないでしょうか。自分は正しく罪はないと思っていたパウロは、変えられ「過去の人生を糞土のように思う。自分は罪びとの頭だ。」と言いました。みなさんは世の光としてどんな生き方をしているのでしょうか。真っ直ぐにイエスキリストの姿を映して生きていますか？

(要約者:高橋奈津江)

(2018年12月16日)